

医療者の予測に比べて透析患者の定時薬内服率は高い

医療法人 衆和会 長崎腎病院

○吉野秀章 山下万紀子 中島さゆり 川口利江 川口 唯 江藤りか 船越
哲 橋口純一郎 原田孝司

【背景・目的】

透析患者の処方量が多いものの、実際の患者内服状況については不明な部分が多く、治療や指導において医療者のイメージが先行する可能性がある。

【目的】

患者の内服率を調べ、医療者の予測する内服率と比較する。また、年齢や処方剤数などの条件が内服率へ与える影響を調査する。

【対象・方法】

当院外来透析患者で自己にて内服可能な 172 名を対象に、透析関連の各種薬剤につき過去 1 ヶ月間の内服率 (%) を聞き取った。医療者は、あらかじめ予測する内服率を調査票に回答した。調査終了後、患者の内服率と医療者の予測する内服率を比較し、さらに患者の内服率を年齢別・クール別・処方剤数別に分析した。

【結果】

平均年齢 63.3 ± 12.1 歳、平均透析歴 8.1 ± 7.8 年、平均処方数 9.5 ± 3.4 剤。調査したすべての薬剤において患者の内服率が医療者の予測に比べて高く、内服率に影響を与えた条件は年齢と時間帯であった。

【考察】

今回の調査は患者の自己申告であるものの、患者の内服率が医療者の予測を上回った。服薬の負担が懸念される薬剤（例：リン吸着剤）であっても内服率は高く、今後医療者は先入観を持つことなく、治療や服薬指導・食事指導すべきと考えた。